

序

飯田市鼎地区は天竜川支流の松川右岸に位置し、飯田市街地に隣接する住宅地域として開発の進行が著しい地区です。一方、近年飯田市街地における開発は飽和状態に達しており、周辺地区の道路環境の整備が進みつつある状況と相まって、市街地周辺へ企業や住宅が拡散しつつあります。この鼎一色地区においては、昭和63年に市道運動公園通り、平成4年には国道153号飯田バイパスが開通して以来、沿線への店舗・事業所等の進出が相次いでおり、この度の開発もこうした傾向の一環にあります。飯伊地方の経済活動の振興を考えますとこうした開発も是認すべきといえ、事前に発掘調査を実施して記録保存を図ることも次善の策ではありますがやむを得ないものといえます。地区内において先人達がとどめた足跡は縄文時代草創期以来各所に刻まれており、縄文時代中期以降大規模な集落が多数営まれ、今に至るまで、人々の営みの連綿と続く地といえます。とくに、中世以降は松尾城に拠った小笠原氏の勢力伸長の基盤となるなど、重要な役割を果たした地域のひとつといえます。

調査の結果は、本報告書のとおりであり、これまで周辺で積み重ねられてきた埋蔵文化財の調査成果に加え、重要な知見を得ることができたわけであり、それは、この地に刻まれた、弥生時代の先人の生活の様子の一端を垣間見ることができたことであり、さらにそれがこの地方全体における歴史解明に大きく寄与するものと信じているところです。

最後になりましたが、文化財保護の本旨に厚いご理解を賜った名星木材株式会社ならびに地元の皆様、現地作業・整理作業に従事された作業員の方々に感謝を申し述べ、刊行の辞とする次第です。

平成8年3月

飯田市教育委員会

教育長 小林 恭之助

例 言

1. 本書は、名星木材株式会社の店舗建設に伴う飯田市鼎一色174-1番地ほかの埋蔵文化財包蔵地田井座遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は開発主体者である名星木材株式会社の委託を受けて、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成6年4月18日～5月13日にかけて行なった。続いて平成7年度中に整理作業及び報告書作成作業を行なった。
4. 今次調査地点は一般国道153号飯田バイパス路線の調査地点と近接しており、連続する遺構番号を付した。
5. 発掘調査及び整理作業においては一貫して遺跡略号T I Zに地番の174-1を付して使用した。
6. 発掘調査位置は国土基本図の区画、LC-84に位置し（社団法人日本測量協会1969「国土基本図図式 同適用規定」参照）、基準点の設定は株式会社ジャステックに委託した。
7. 本文の記載については、住居址・溝址・竪穴状址・土坑の順とした。遺構図・遺物図は本文と併せ挿図とし、写真図版は本文末に一括した。
8. 本書は福澤好晃が執筆・編集を行ない、小林正春が総括した。
9. 本書に掲載した図面類の整理は新井幸子・竹本常子・宮内真理子・福澤が、遺物実測は古根素子・山下誠一・福澤が行ない、写真撮影は福澤が行なった。
10. 本書に掲載した遺構図の中に記した数字は、それぞれの深さ（単位cm）を表わしている。
11. 本書に関連する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館で保管している。

目 次

序	I
例 言	II
目 次	III
I 調査の経過	1
1. 調査に至るまでの経過	
2. 調査の経過	
3. 調査組織	
II 遺跡の環境	3
1. 自然環境	
2. 歴史環境	
III 調査結果	9
1. 竪穴住居址	
2. 溝址	
3. 竪穴状遺構	
4. 土坑	
IV まとめ	19
引用参考文献	
報告書抄録	

挿 図 目 次

挿図 1. 調査遺跡及び周辺遺跡位置図	5
挿図 2. 調査位置及び周辺地図	6
挿図 3. 基準メッシュ図区画調査位置図	7
挿図 4. 遺構全体図	8
挿図 5. 50号住居址	9
挿図 6. 50号住居址出土遺物	10
挿図 7. 51号住居址	11
挿図 8. 51号住居址出土遺物	12
挿図 9. 溝址20出土遺物	12
挿図10. 溝址20	13
挿図11. 竪穴25	14

挿図12. 土坑71	14
挿図13. 周辺遺構図	15
挿図14. 周辺遺構図	16
挿図15. 周辺遺構図	17
挿図16. 遺構外出土遺物	18

写真図版目次

図版1. 遺跡全景	24
図版2. 調査区全景	25
図版3. 50号住居址・同遺物出土状態	26
図版4. 50号住居址出土土器	27
図版5. 50号住居址出土石器・51号住居址	28
図版6. 51号住居址遺物出土状態・同出土土器	29
図版7. 51号住居址出土石器・溝址20出土遺物・土坑71	30
図版8. 竪穴25・遺構外出土遺物	31
図版9. 重機表土剥ぎ作業・調査スナップ	32
図版10. 調査スナップ・委託測量作業	33

I 調査の経過

1. 調査に至るまでの経過

平成6年2月10日付で長野県下伊那郡高森町下市田1289-1番地、名星木材株式会社代表取締役古瀬弘文より、飯田市鼎一色地籍での店舗建設について協議依頼書が提出されました。

当該地は埋蔵文化財包蔵地田井座遺跡の一面に位置し、一般国道153号飯田バイパス建設に先立つ発掘調査で、縄文時代から中世にかけての重要遺構が多数検出された地点に隣接する。

協議依頼書に基づいて平成6年3月11日長野県教育委員会文化課担当職員を交え現地協議を実施した結果、保護措置を講ずる必要があると県教委の回答がなされた（5教文第7-294号）。

その後、平成6年4月上旬、建設計画が具体的になったため、重機による試掘調査を行い、遺構分布状態を確認した。調査区西側で、弥生時代の住居址が確認され、本調査の実施が必要であると判断された。

2. 調査の経過

関係者による諸協議を受け、平成6年4月18日委託者名星木材株式会社代表取締役古瀬弘文と受託者飯田市長田中秀典との間で、発掘調査に関する委託契約を締結し、これに基づいて同日発掘調査に着手した。人力による遺構検出作業の後、個々の遺構について掘り下げ精査を行った。そして写真撮影・測量調査を実施し、5月13日現地での作業を終了した。

その後、飯田市考古資料館において現地で記録された図面・写真類の整理作業、出土遺物の水洗・注記・接合・復元等整理作業および報告書作成を、平成7年度にかけて行った。

3. 調査組織

(1) 調査

調査担当者	小林正春
調査員	吉川豊・山下誠一・馬場保之・吉川金利 福澤好晃・伊藤尚志・下平博行
現場作業員	市瀬房吉・伊坪節・伊藤禎七・恩沢不二子 坂下やすゑ・清水三郎・菅沼和加子・鈴木重雄 中平隆雄・西塚洋子・広井保・増山局武 牧内達雄・松井明治・松下成司・松下直市 宮下貞一・山田康夫・吉川和夫
整理作業員	新井幸子・新井ゆり子・池田幸子・奥村栄子 金井照子・金子裕子・唐沢古千代・木下早苗 木下玲子・櫛原勝子・小池千津子・小平不二子 小林千枝・斉藤徳子・佐々木真奈美・佐々木美千枝 佐藤知代子・鈴木尊子・関島真由美・竹本常子 田中薫・田中恵子・丹羽由美・萩原弘枝

樋本宣子・平栗陽子・福沢育子・福沢幸子
古根素子・牧内喜久子・牧内八代・松島直美
松本恭子・三浦厚子・南井規子・宮内真理子
森藤美知子・吉川悦子・吉川紀美子・吉沢佐紀子

(2) 事務局

飯田市教育委員会社会教育課

横田 穆 (社会教育課長)
小林 正春 (〃 文化係長)
吉川 豊 (〃 文化係)
山下 誠一 (〃 〃)
馬場 保之 (〃 〃)
吉川 金利 (〃 〃)
福澤 好晃 (〃 〃)
伊藤 尚志 (〃 〃)
下平 博行 (〃 〃)
岡田 茂子 (〃 社会教育係)

Ⅱ 遺跡の環境

1. 自然環境

鼎地区は昭和59年12月の飯田市との合併により行政区画上、飯田市鼎となった。

鼎地区は飯田市街地の南西側に位置し、飯田松川を挟んで対峙する飯田松川に沿った細長い地区である。西側は伊賀良地区に接し、南東側は松尾地区と上郷地区に接する。

飯田市は南アルプスと中央アルプスに挟まれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴い、大小の段丘崖が形成され、その段丘面を天竜川の支流河川が各所で開析し、複雑な地形を呈している。

鼎地区の場合、微地形の変化はあるものの、飯田松川に平行する段丘地形上に立地し、基本的には三つの段丘面より構成される。上位の段丘では標高500m前後に笠松山系から発達した扇状地形の末端がある。

田井座遺跡が位置している一色地籍は、鼎地区の最上位段丘にあり、伊賀良北方地籍と接している。中央アルプスの笠松山麓から発達した扇状地が終息し段丘面に移行する付近で、天竜川の支流毛賀沢川による浸蝕谷が始まり、飯田松川に面した段丘崖との間に舌状台地が形成される。この舌状台地基部付近が一色地籍で、その東方は名古屋地籍となる。標高500m前後で形成され始めた舌状台地の幅は、約300mである。両側の段丘崖に近い部分約100mずつが乾燥した台地で、その中央部付近は東西方向にやや低く凹み、約100mが湿地帯を成している。台地上は全面に強い粘質のローム層が分布しており、自然の風水害に対しては安定した地形条件下にあるといえる。

田井座遺跡はこの一色地籍の西隅に位置し、北西側は山麓から続く大扇状地先端部にあたり、伊賀良西の原地籍に連続する。南西側は毛賀沢川に面する台地端から中央湿地までの間がやや小高い台地で、中央から北東と南西に緩やかに傾斜している。南西向きの緩斜面は水田の造成により削平埋め立てがあり、一部ローム面まで削平が及んでいた。北東側の緩斜面はおおむね果樹園で深耕はあるものの削平はなく、地表から50~100cmでローム面に達する。検出調査した遺構はローム面に掘り込まれている。

以上のように、田井座遺跡は台地端に位置し、乾燥した場所であると同時に、すぐ近くに湿地があり、生活・生産を営むのに適した場所といえる。

2. 歴史環境

鼎地区における埋蔵文化財包蔵地は、松川氾濫源および段丘崖部を除くほぼ全域に分布しており、これまで発掘調査がなされた遺跡は、代田、山岸、天伯A、天伯B、猿小場、矢高原、八幡原、黒河内、田井座、一色、名古屋下、六反畑、日向田、柳添の各遺跡がある。

こうした文化財に表われた先人達の活動の証左は、旧石器時代までさかのぼる。断片的な資料ではあるが、天伯B・猿小場遺跡からはナイフ形石器が出土している。

縄文時代になると、地区内全域に遺跡の存在することが確認されている。しかし、その内容はそれぞれの時期によって異なっている。早期・前期の遺跡・遺物の分布は複数の遺跡で認められるが、集落址の調査例は田井座遺跡に限られ、定着・安定した遺跡の姿を伺うことができるようになるのは、続く中

期になってからである。地区内全域の中位・高位段丘上の各所に相当規模の集落が分布しており、これまでに天伯A・柳添遺跡等が調査されている。後期・晩期になると遺跡数・規模ともに減じ、猿小場・山岸・六反畑遺跡が調査されているにすぎず、具体的な状況は不明である。

弥生時代においても集落立地は基本的に前時代と変わらないと考えられるが、前期・中期についてはなお不明である。後期になると、遺跡数が増加するとともに調査例も増す。該期の集落展開としては、中・低位段丘の湧水線および各段丘面中央に発達する湿地帯を利用した水田経営と高位段丘上での陸耕を基盤とするものが考えられる。後期前半では猿小場・山岸遺跡で住居址が調査されている。後期後半になると、調査面積の大小、遺跡範囲内での調査区の位置など問題はあるものの、調査区内に住居址が密集する大規模な集落址と、住居址が散在する集落址という大きく2つの類型がみられる。前者は低位段丘面の山岸遺跡に代表され、後者は高位段丘面から扇状地上に多く、猿小場・田井座遺跡があげられる。それは前述の基盤となる生業形態の相違と関わるものと考えられる。

古墳時代の様相は、前期の状況がほとんど不明であり、わずかに山岸遺跡にその一端を窺える程度であるが、後期になると調査事例が増加する。この時期の集落址としては、低位段丘面上の山岸・天伯B・六反畑・黒河内遺跡がある。また、集落址以外に古墳があり、鼎地区には現在消滅したものを含め14基がある。5世紀後半の物見塚古墳が、地区内最古のものであるが、それ以外は6世紀以降の縦穴式石室を有する小円墳である。

奈良時代の鼎地区の状況は不明であるが、古墳時代後期を含め奈良・平安時代以降、隣接する松尾・伊賀良地区において、東山道の経路および「育良駅」の所在地、荘園を構成する村落の起源等に関すると思われる箇所があり、当地区においてもそれらとの関連を考える必要がある。

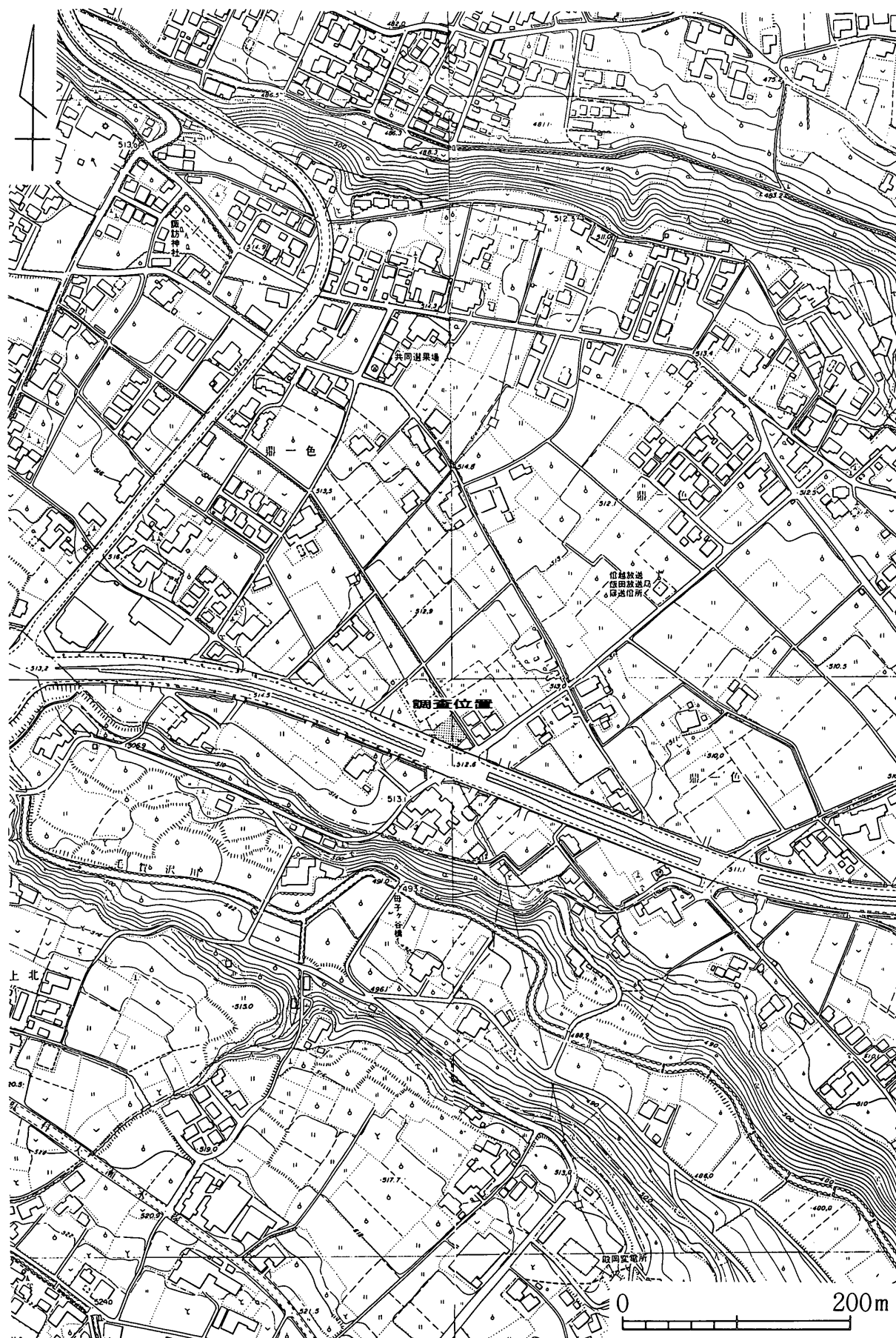
平安時代の集落址は地区内全域に分布し、猿小場遺跡では9世紀後半を中心に25軒と多くの住居址が検出されている。しかし、一般的には遺跡単位では住居址は少なく、むしろ散在する分布状態をみせている。日向田遺跡では平安時代後期の住居址から墨書土器が出土しており、前述の伊賀良地区等との関連が暗示される。なお、平安時代の住居址が検出された遺跡の多くからは、中世の住居址も検出されており、猿小場遺跡では16軒の住居址が調査されている。

以上、鼎地区の遺跡を中心に各時代を概観した。こうした脈絡の中で、今次発掘調査の成果がどのように位置づけられるかは本書の内容によるとともに、地域全体での当該期資料を整理する中で明らかにされるといえる。

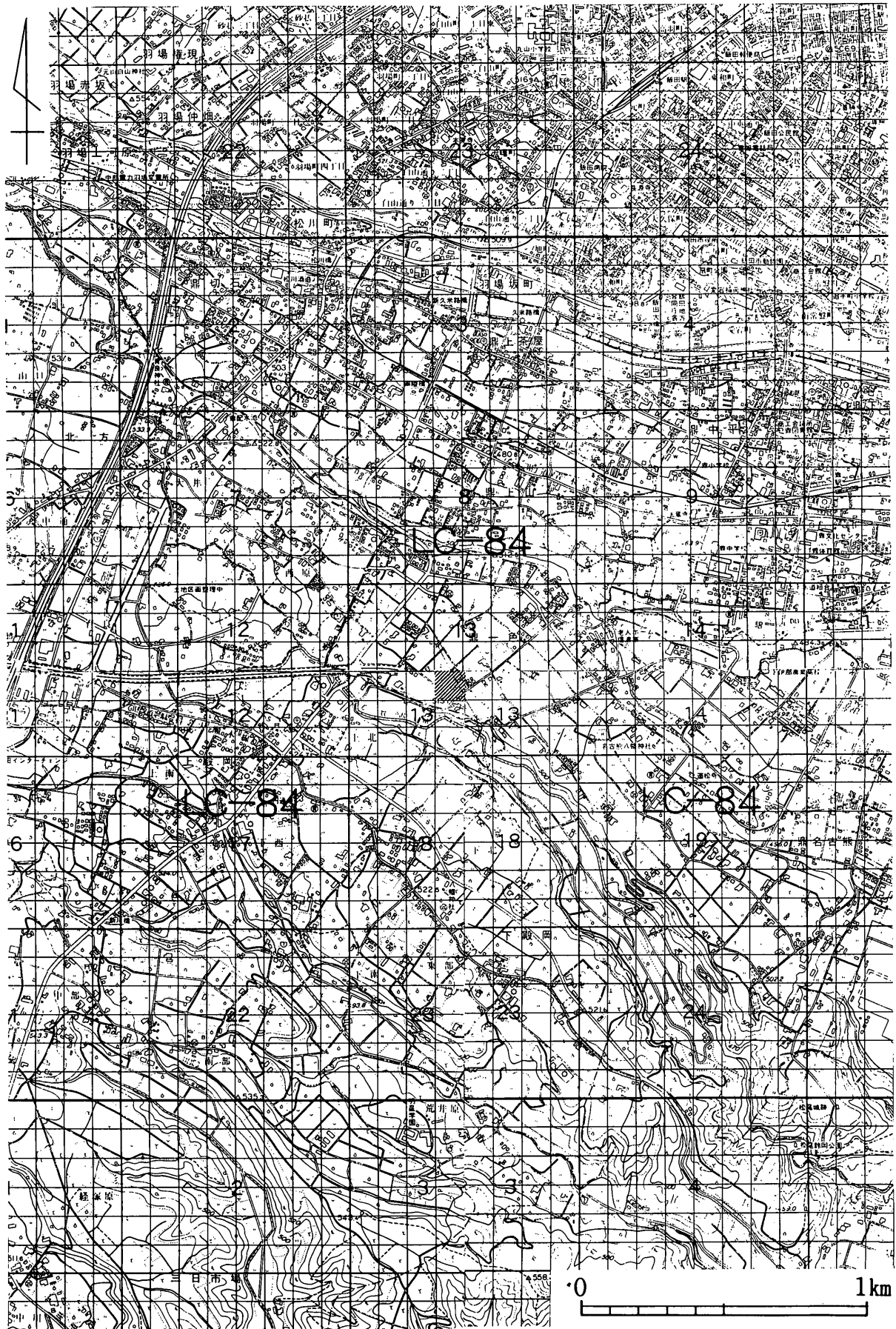


1. 田井座遺跡 2. 一色遺跡 3. 名古熊下遺跡 4. 天伯B遺跡 5. 猿小場遺跡 6. 天伯A遺跡 7. 柳添遺跡
 8. 山岸遺跡 9. 日向田遺跡 10. 六反畑遺跡 11. 黒河内遺跡 12. 天伯1号古墳 13. 天伯1号古墳 14. 物見塚古墳

挿図1. 調査遺跡及び周辺遺跡位置図



挿図 2. 調査位置及び周辺地図



挿図3. 基準メッシュ図区画調査位置図

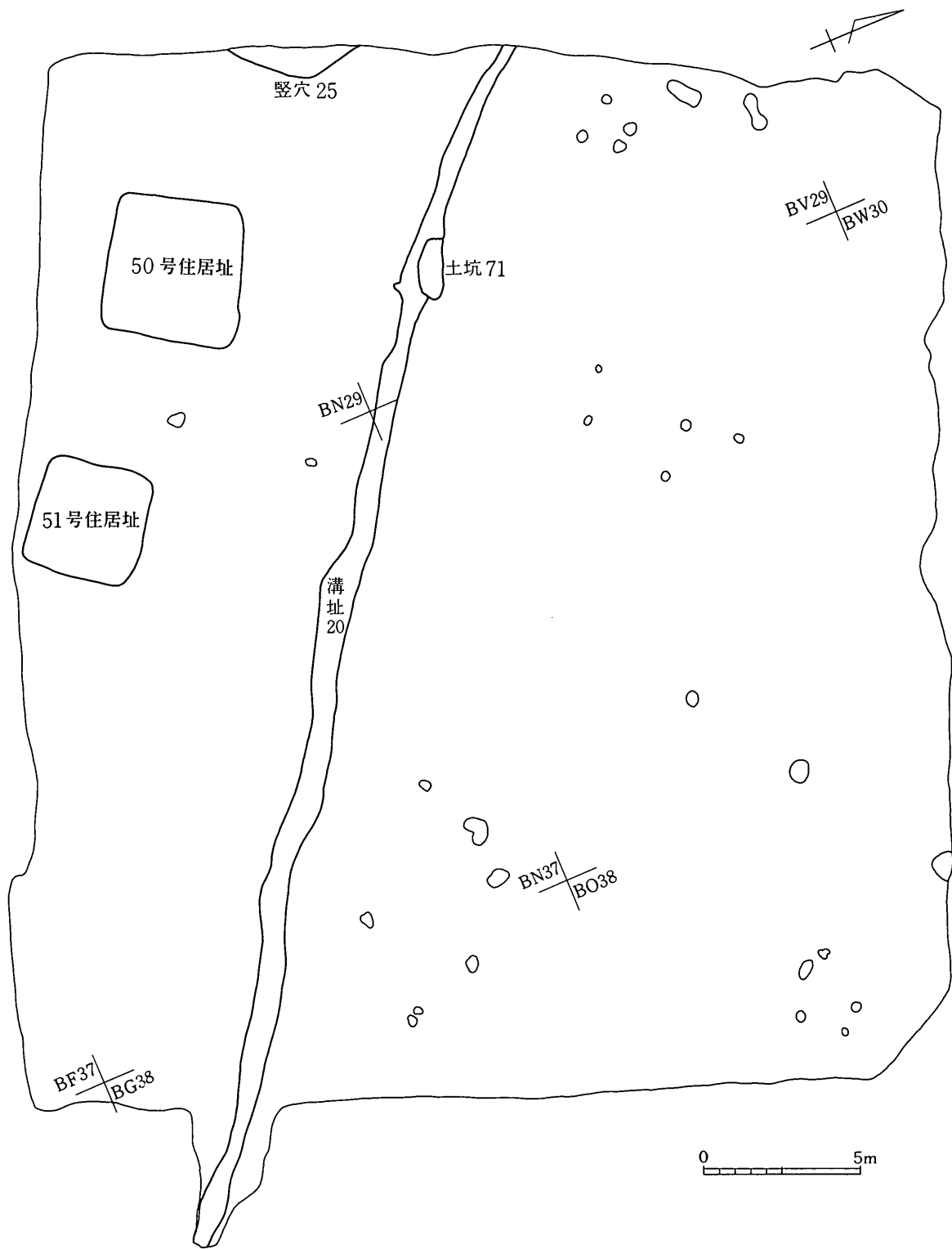


插图 4. 遺構全体図

Ⅲ 調査結果

(1) 竪穴住居址

① 50号住居址 (挿図5・6)

BM26を中心として黒褐色土の埋土の存在により検出した隅丸方形を呈する竪穴住居址である。規模は448×424cmを測り、主軸方向はN62°Wを示す。壁高は32cm前後で急角度な壁面をなす。

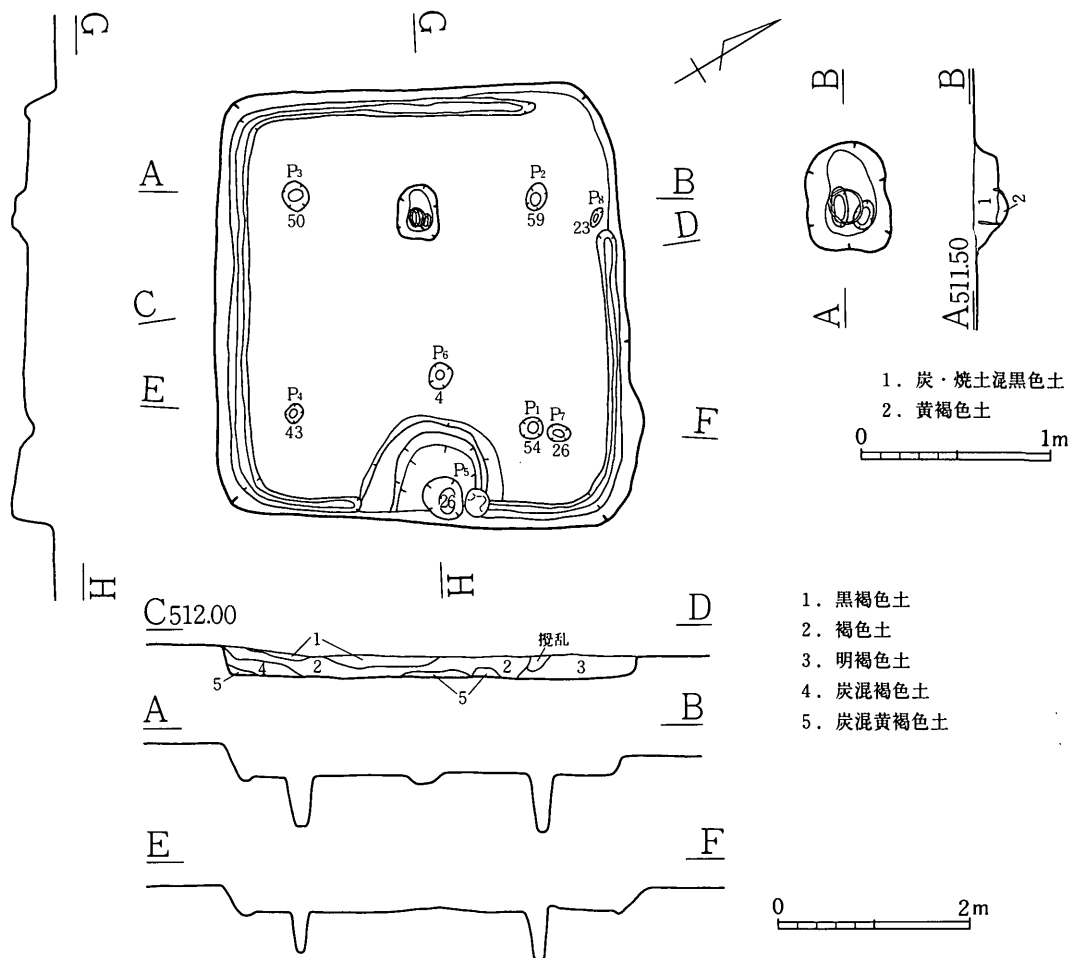
埋土は上層から黒褐色土・褐色土・明褐色土・炭混褐色土・炭混黄褐色土の五層である。

床面は、ローム層上に灰色粘質土で非常に硬く締まった面がほぼ全面にわたってあり、北側の一部以外ほぼ全体に周溝が確認される。

主柱穴はP1～P4の4本確認される。P1南の南東壁ほぼ中央に掘り込まれたP5は不整形を呈し、周囲に高い土手状縁部が検出された。形態から入り口施設と考えられる。

P2とP3の中間やや中央寄りに炉址が設けられており、中央側に甕を埋設した土器埋設炉で、炭が混る焼土が広く確認できる。

出土遺物には、甕・高坏・横刃型石器・有肩扇状形石器があり、これらの出土遺物等より弥生時代後期後半に位置づけられる。



挿図5. 50号住居址

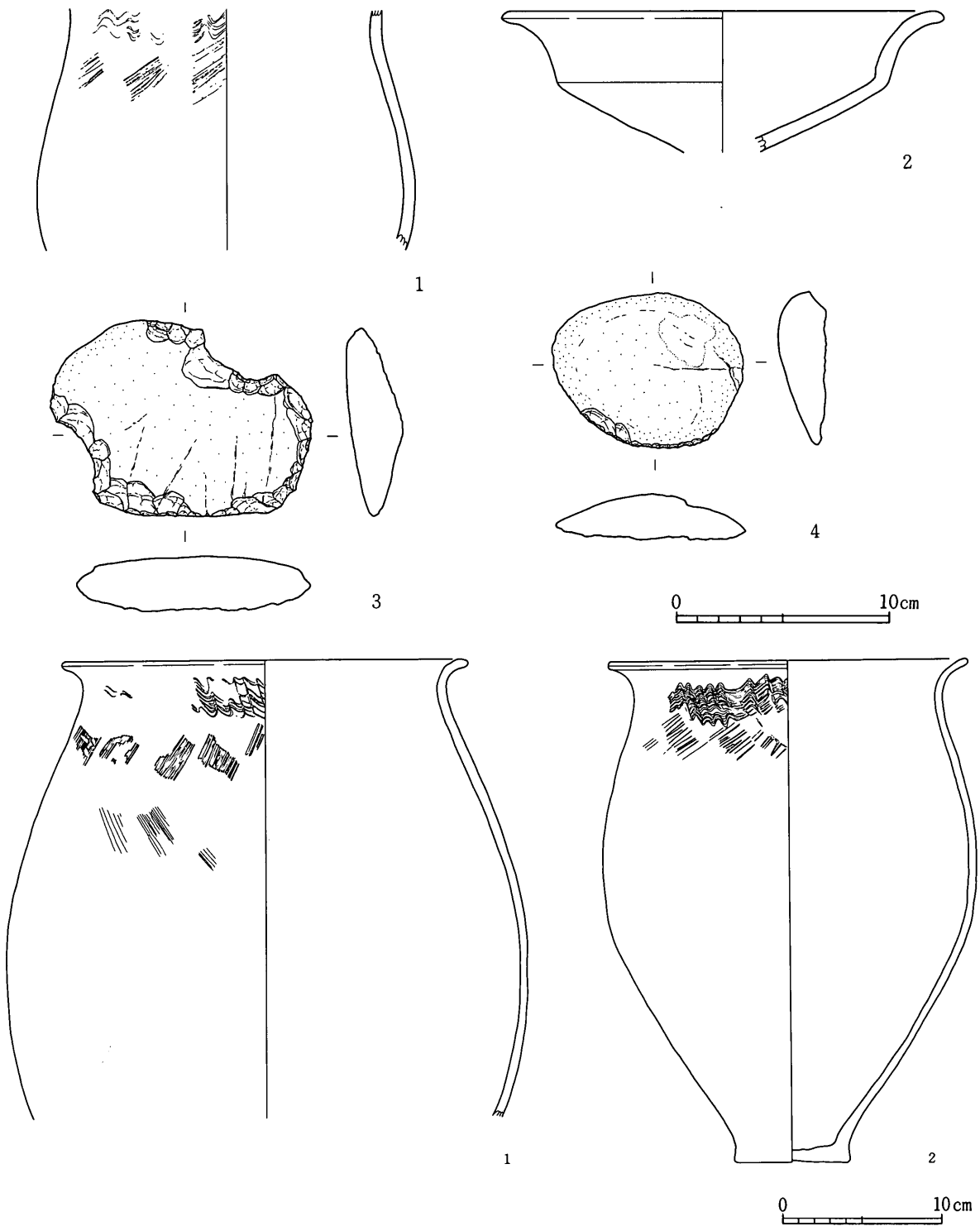


插图 6. 50号住居址出土遗物

②51号住居址 (挿図7・8)

B J 29を中心として検出した隅丸方形を呈する竪穴住居址である。規模は368×360cmを測り、主軸方向はN53°Wを示す。壁高は29cm前後で急角度な壁面をなす。

埋土は上層から黄色土混黒色土・黄褐色土・炭混黒褐色土・炭混暗褐色土の四層である。

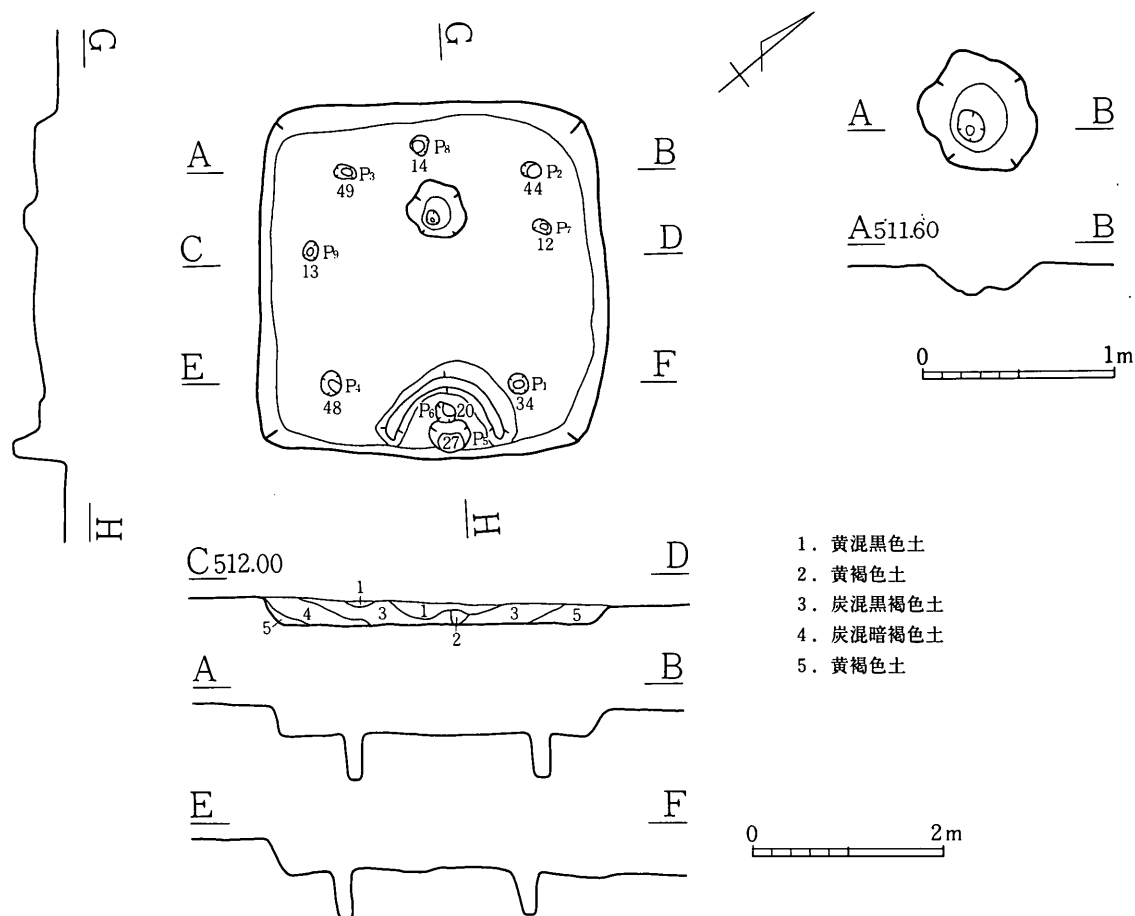
床面は、非常に硬く締まった面が全面にあり、貼床される。

主柱穴はP 1～P 4の4本確認される。P 1・P 4の中央部から南東側壁にかけて、円形に盛り上がった土手状縁部があり、その内側にP 5・P 6が掘り込まれる。形態より、それらは入り口施設と考えられる。

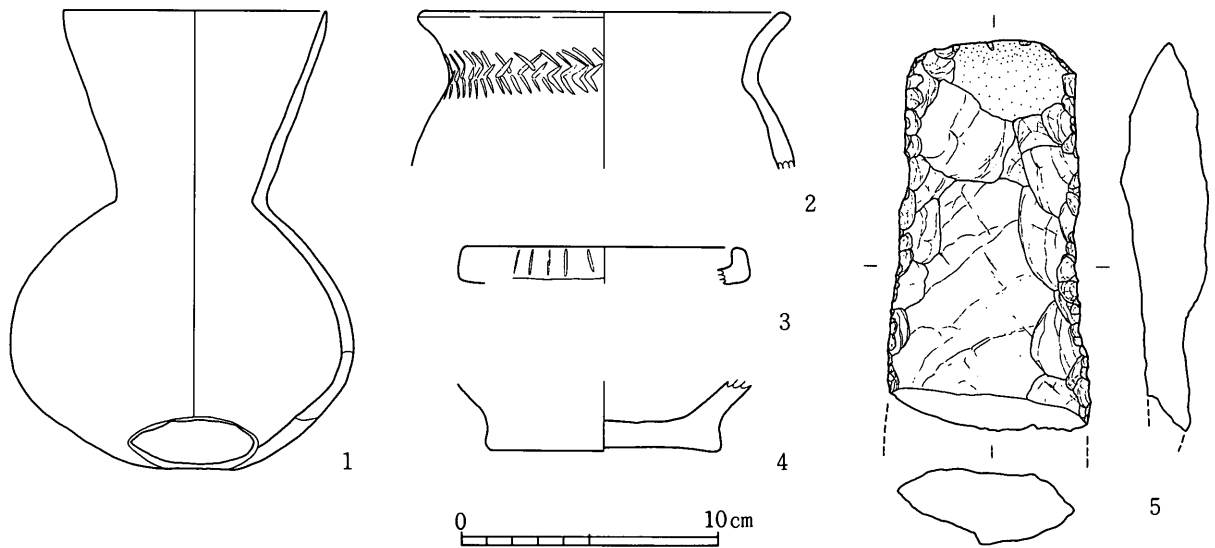
P 2とP 3の中間やや中央寄りに炉址が設けられている。焼土が厚く発達しており、土器等の遺物の出土はなく、埋設土器を持たない地床炉である。

出土遺物は、甕・台付甕・長頸壺・打製石斧がある。特に長頸壺(挿図8・1)は、東海系の土器の搬入品であり、台付甕(挿図8・2)は、東海系土器の模倣品である。

出土遺物等から、弥生時代後期後半に位置づけられる。



挿図7. 51号住居址



挿図 8. 51号住居址出土遺物

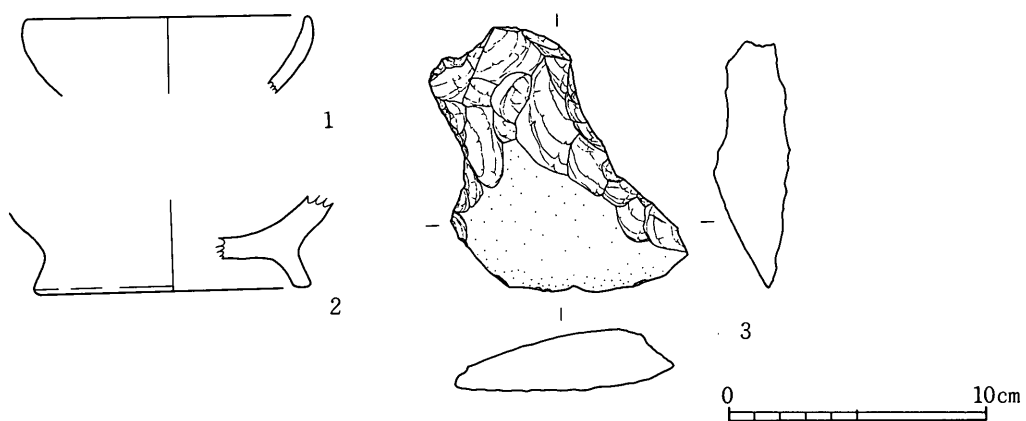
(2) 溝 址

①溝20 (挿図 9・10)

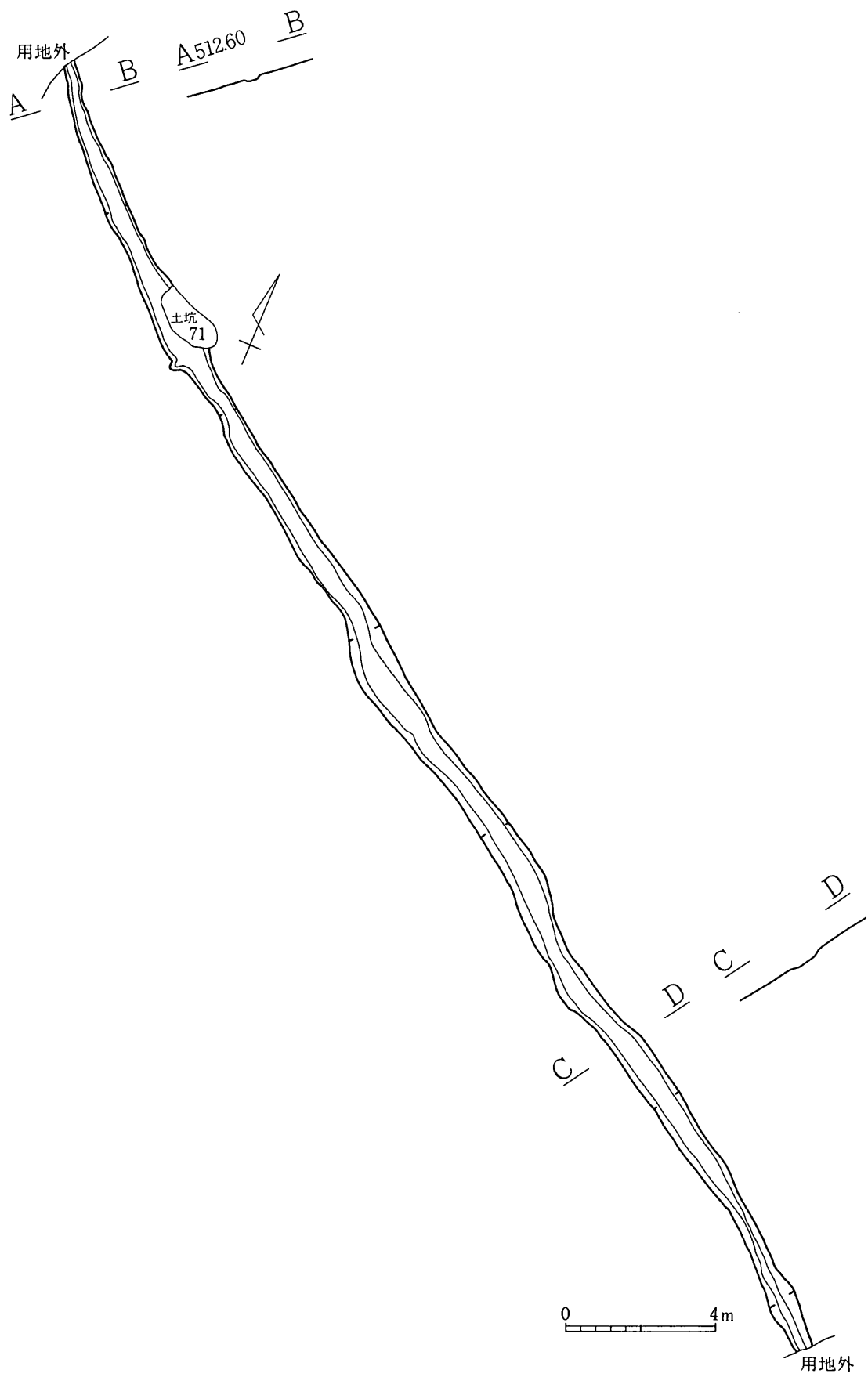
一般国道153号飯田バイパス建設に伴い実施した昭和63年度田井座遺跡発掘調査において、確認された溝址20の延長部分約40mを今回調査した。昭和63年の調査では、南北にのびる溝で、南側は道路に北側は用地外につながるため、調査できた範囲で、全長6m、幅80cm、深さ5cmとごく浅い溝である。出土遺物がないため、時期・性格は不明であると記述されている。

今次調査により確認された溝址は、B S 25からB G 41にかけて延びるもので、全長39m、幅32~112cm、深さ4~10cmで、位置および形態より上記溝址20と同一の遺構と判断できる。

出土遺物は、土師器片・有肩扇状形石器・打製石斧・大平鉢があり、これらより時期は中世以降と判断できる。また、埋土には砂礫等の水性の堆積は全くみられないため、水が流れた溝というよりはむしろ何らかの区画をした溝である可能性が大である。



挿図 9. 溝址20出土遺物



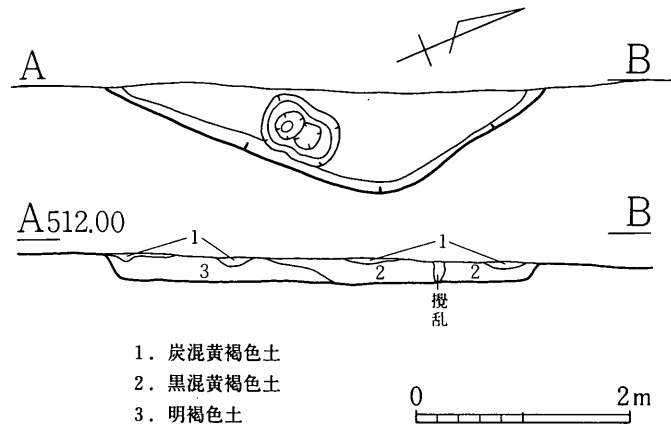
挿図10. 溝址20

(3) 竪穴状遺構

① 竪穴25 (挿図11)

調査区北西端、BO24で検出された掘込みで、ほとんどが用地外に続くため完掘できなかった。埋土は赤褐色土でローム層に掘り込まれている。規模・形態は不明である。深さおよそ20cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

出土遺物はなく、時期・性格は不明である。



挿図11. 竪穴25

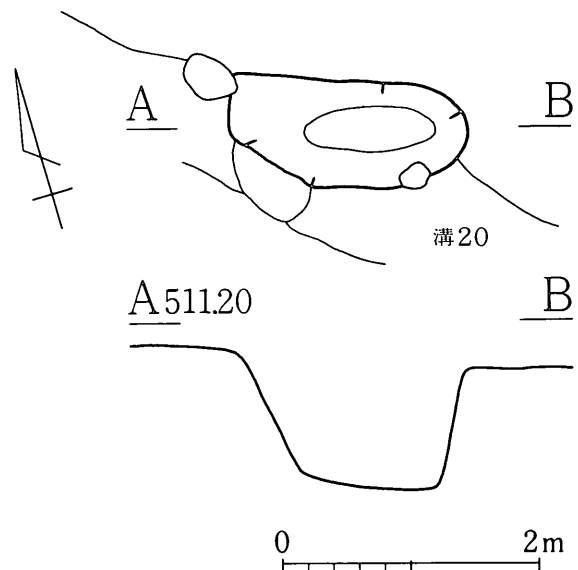
(4) 土 坑

① 土坑71 (挿図12)

調査区北西側BP28付近で、溝址20に切られて検出された。

184×84cmの不整楕円形を呈し、深さ96cmを測る。埋土は明褐色土で、底部はほぼ平坦である。東側が急に立ち上がるのに対し、西側の壁は緩やかな立ち上がりを示す。

出土遺物はなく、時期・性格は不明である。



挿図12. 土坑71

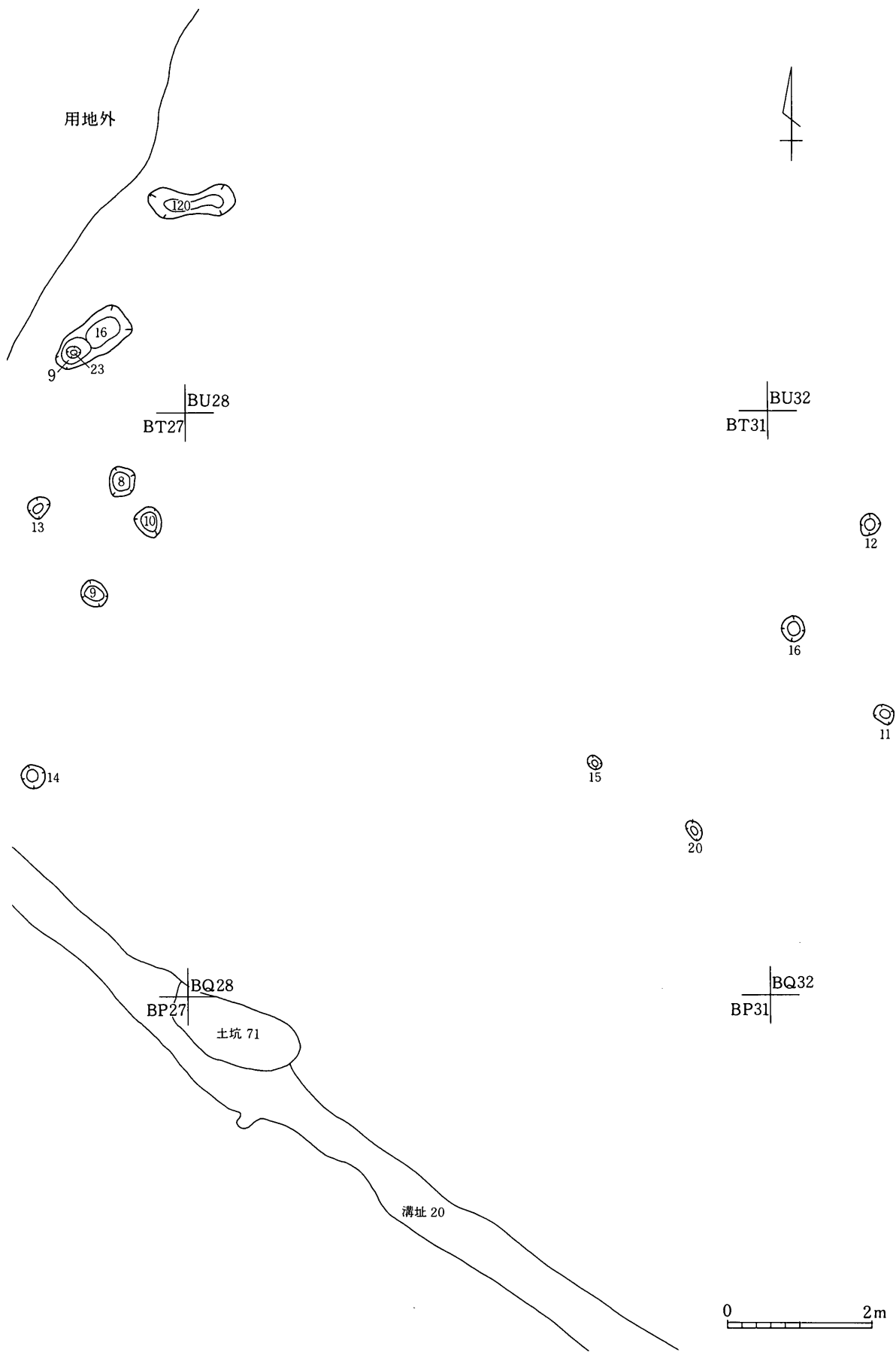


插图13. 周边遗構図

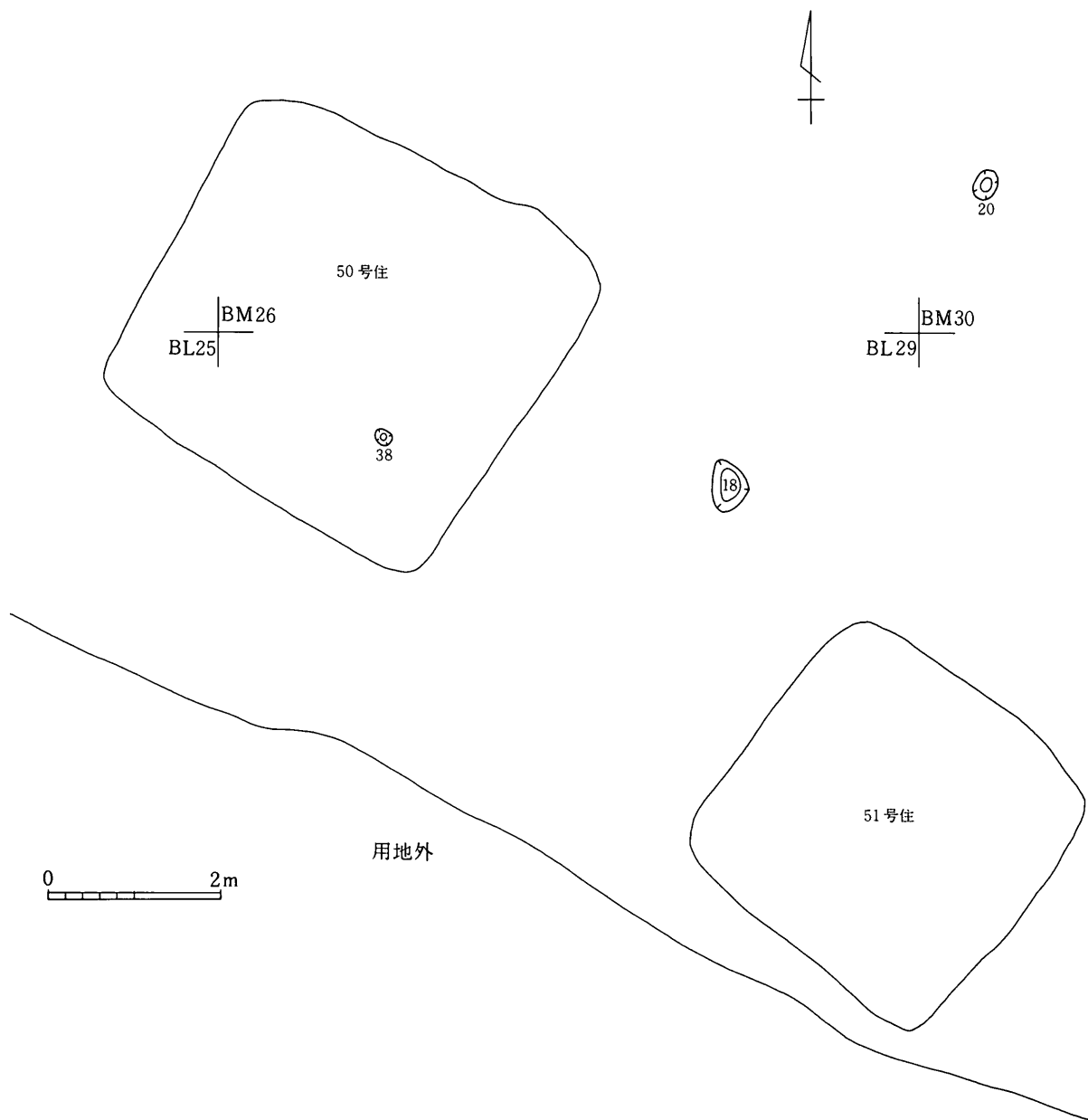
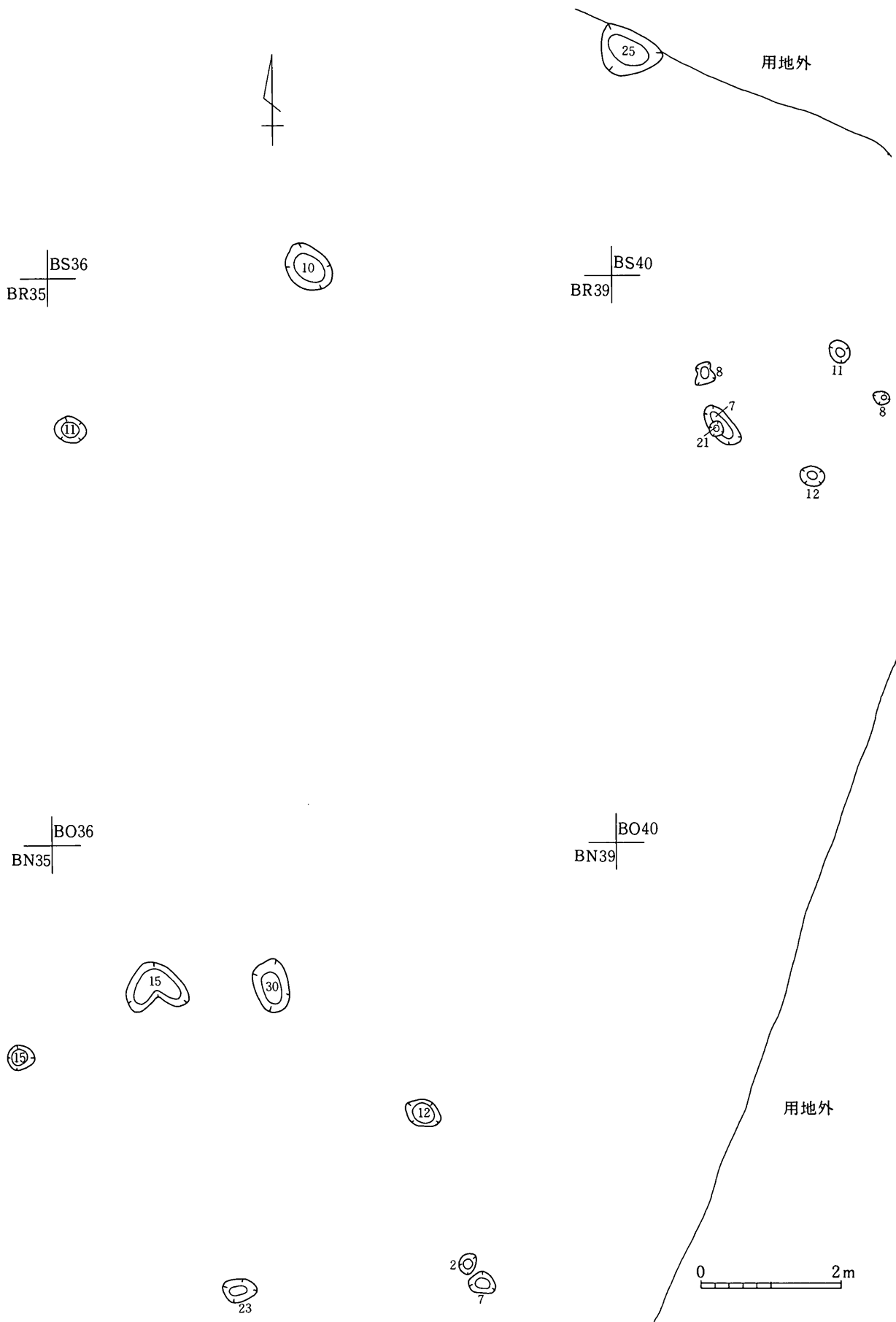
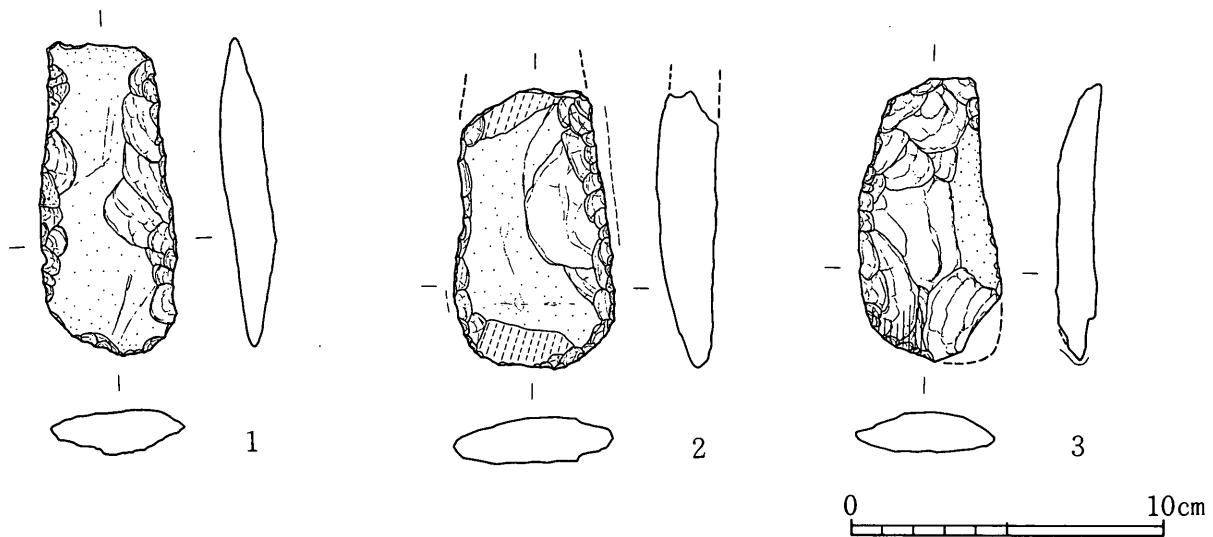


插图14. 周边遺構図



挿図15. 周辺遺構図



挿図16. 遺構外出土遺物

Ⅳ ま と め

今次調査地点およびその周辺遺跡は、これまで数々の緊急発掘調査が実施されており、調査成果が積み重ねられてきた。その結果、本遺跡の性格が具体的に明らかになってくるなかでの調査であったが、今回の調査も限られた範囲内でのものであり、遺跡の全体像を把握するには多少困難である。しかし、今までの調査箇所より東側に寄った地点、当遺跡の東端に位置するため、集落範囲を確定する何らかの事実確認の可能性もあった。今次調査で検出された遺構・遺物は、前述のとおりであり、調査成果を整理してまとめとしたい。

(1)縄文時代

該期の遺構・遺物は、今次調査では確認できなかった。当遺跡では、昭和62年に市道運動公園通り建設時に5軒（飯田市教育委員会 1988）、昭和63年の一般国道153号飯田バイパス建設時に1軒（飯田市教育委員会 1991）、平成5年の株式会社コナカ店舗建設時に1軒（飯田市教育委員会 1995）と、計7軒の竪穴住居址が確認されている。それらは前期初頭を中心としており、本調査地点の南西側にて出土しており、集落の展開が考えられる。

また、今回の調査で時期・性格不明とした竪穴25および土坑71は、埋土の状況などよりこの時期に比定される可能性があり、とすれば、今回調査地点付近が、該期集落の東限を示すことも考えられる。

(2)弥生時代

これまでの調査で竪穴住居址35軒、方形周溝墓11基等が調査されており、本遺跡を代表する時期といえる。今次調査では、後期後半の竪穴住居址2軒を検出したのみであるが、遺跡の東端にあたる調査地においてこのように遺構が確認できたことは、尾根状に延びる微高地上に展開される本遺跡の、集落の東端にあると判断できる。

また、この集落の北東側は湿地に続いており、南西側は、毛賀沢川への段丘崖となっていることより、この湿地は本遺跡の生産域にあたる可能性がある。

50・51号住居址は、出土土器から、ほぼ同時期と判断でき、主軸の方向がほぼ同じであり、4.5m程の間隔を置いた配置状況は、集落内で何らかの規則性のもとに構築されたことも考えられる。

本遺跡は、飯田市内の該期における遺跡のなかで高位段丘上における代表的な遺跡の一つであり、一定規模の集落が確認されている。今次調査においても、その一端を明らかにするとともに、東限部の把握により集落の範囲確認に大きな示唆を得ることができた。

遺跡西側の限界が未把握な状況であるが、遺跡立地の地形及び既調査により集結された資料等を検討することにより、集落規模等の具体的な姿を解明可能な段階が近づきつつあると考えられる。

(3)中世以降

調査地南を通る一般国道153号飯田バイパス建設時に確認された、溝20の延長部が、南東に緩やかに傾斜する地形に沿って確認できた。埋土には、砂礫等の水性の堆積は見られず、底の凹凸もほとんどない。

一般国道153号飯田バイパス建設時に確認された、溝18・22・26とほぼ平行であり、溝23と直行することなどより、水が流れた溝というよりは何らかの区画をした溝の可能性はある。

主要な施設の存在は確認されていないため、具体的な様相の言及はできないが、周囲に屋敷などの居住施設が存在した可能性も考えられる。

今回の調査により、いくつかの新知見を加えることができたが、今回の調査結果のみで、遺跡の全体像を提示することが困難なことは先述のとおりである。

なお、今回の調査結果およびそれ以前の三回にわたる調査結果により、本遺跡のある程度の様相を知りうる段階となっているが、遺跡全体の範囲からすれば、その一割弱の断片的な調査が行われたのみである。今後とも周辺部分における調査の集積が必要なことはいうまでもなく、そのためには地道な埋蔵文化財保護活動が必要不可欠であるといえる。

最後に、文化財保護の本旨に御理解をいただき、調査の実施にあたって多大なる御高配・御協力をいただいた名星木材株式会社に対し、謝意を表す次第である。

V 引用・参考文献

- | | | |
|-----------|------|-----------------|
| 飯田市教育委員会 | 1988 | 『田井座遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1992 | 『田井座・一色・名古熊下遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1992 | 『田井座遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1992 | 『八幡原・物見塚古墳』 |
| 飯田市教育委員会 | 1995 | 『田井座遺跡』 |
| 鼎町史刊行委員会 | 1986 | 『鼎町史』 |
| 下伊那史編纂委員会 | 1955 | 『下伊那史 第2巻』 |
| 下伊那史編纂委員会 | 1955 | 『下伊那史 第3巻』 |
| 下伊那史編纂委員会 | 1955 | 『下伊那史 第4巻』 |
| 長野県史刊行会 | 1983 | 『長野県史 考古資料編』 |

Ⅵ 報告書抄録

ふりがな	たいざいせき
書名	田井座遺跡
副書名	店舗建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地田井座遺跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	福澤好晃
編集機関	長野県飯田市教育委員会
所在地	〒395 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 ☎0265-53-4545
発行年月日	西暦1996年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
たいざ 田井座遺跡	いいたしかなえいつしき 飯田市鼎一色 174-1他	2053	35° 30' 02"	137° 48' 45"	平成6年 4月18日 } 平成6年 5月13日	960㎡	店舗建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
田井座遺跡	集落址	弥生後期 ～中世 以降	竪穴住居址 2軒 溝址 1条 竪穴状遺構 1基 土坑 1基	弥生式土器 石器			

写 真 图 版



遺跡全景



調査区全景



調査区全景



50号住居址



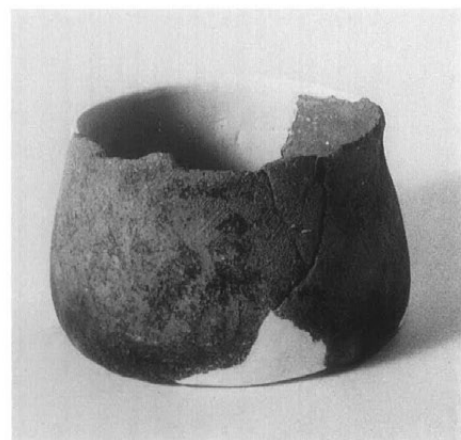
同遺物出土状態



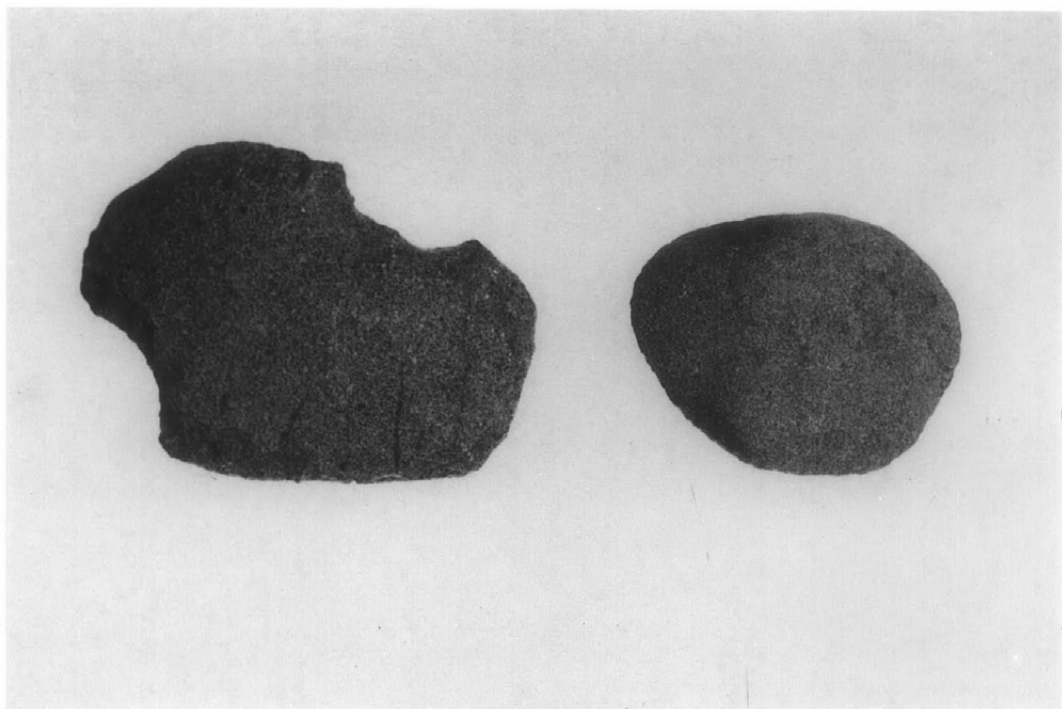
50号住居址出土土器



50号住居址出土土器



50号住居址出土土器



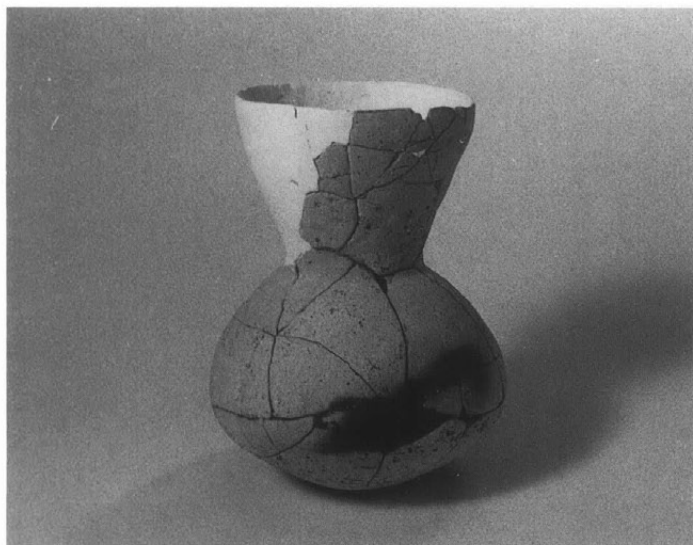
50号住居址出土石器



51号住居址



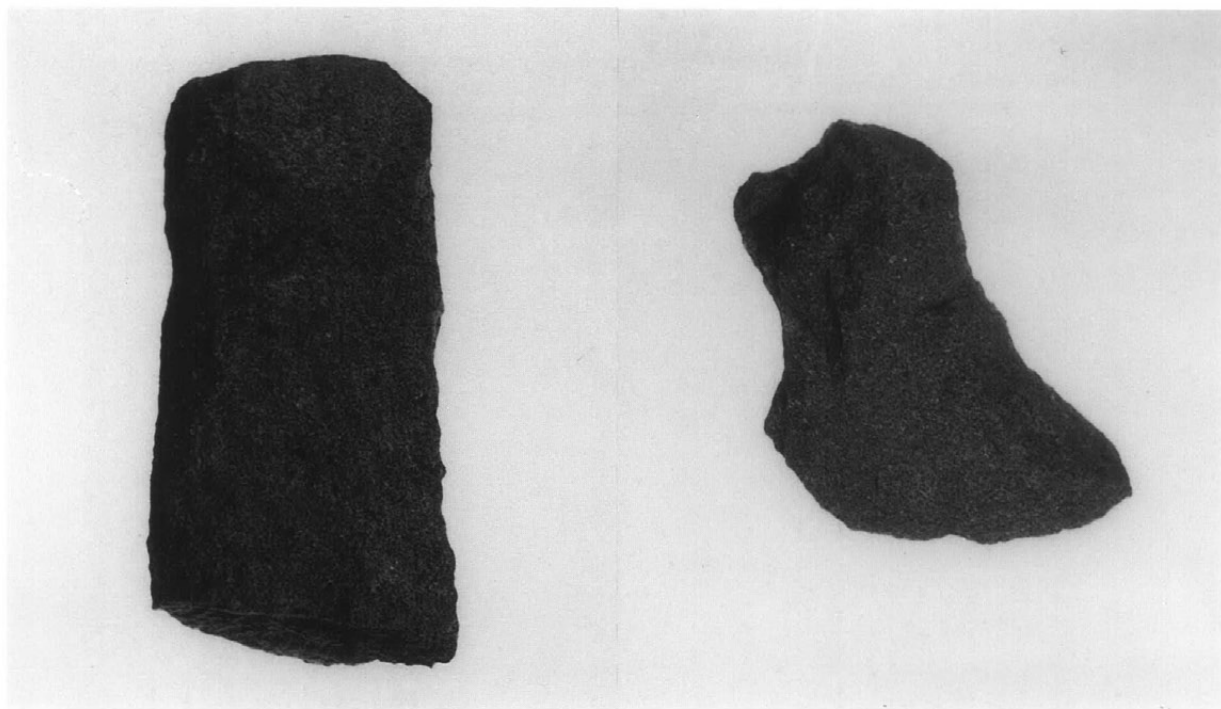
51号住居址遺物出土状态



同出土土器



同出土土器



51号住居址出土石器

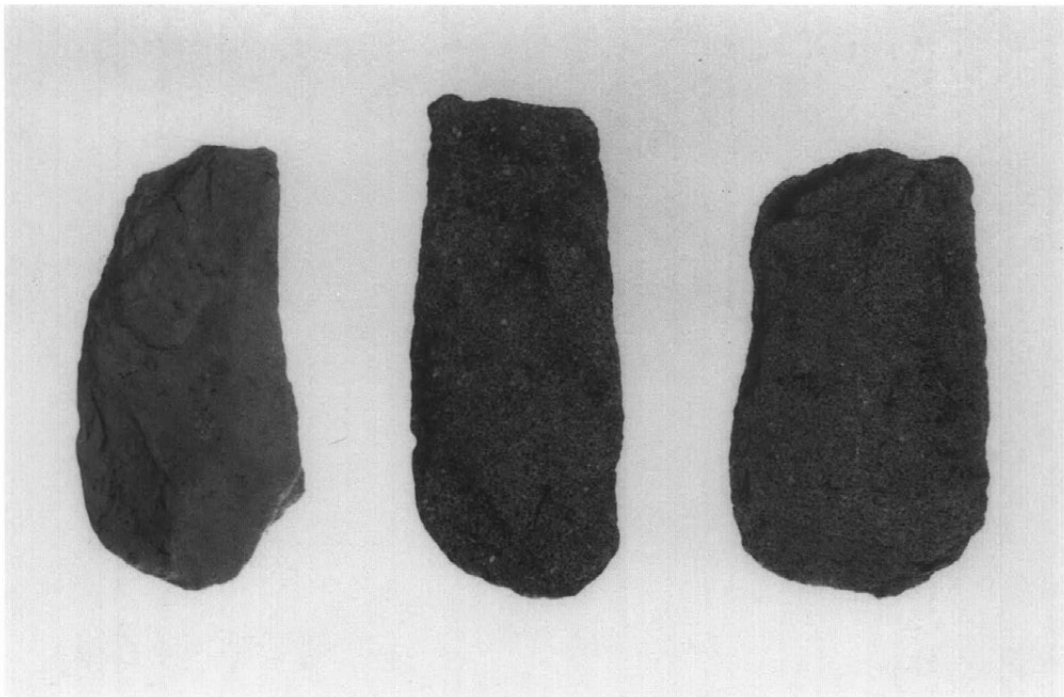
溝址20出土遺物



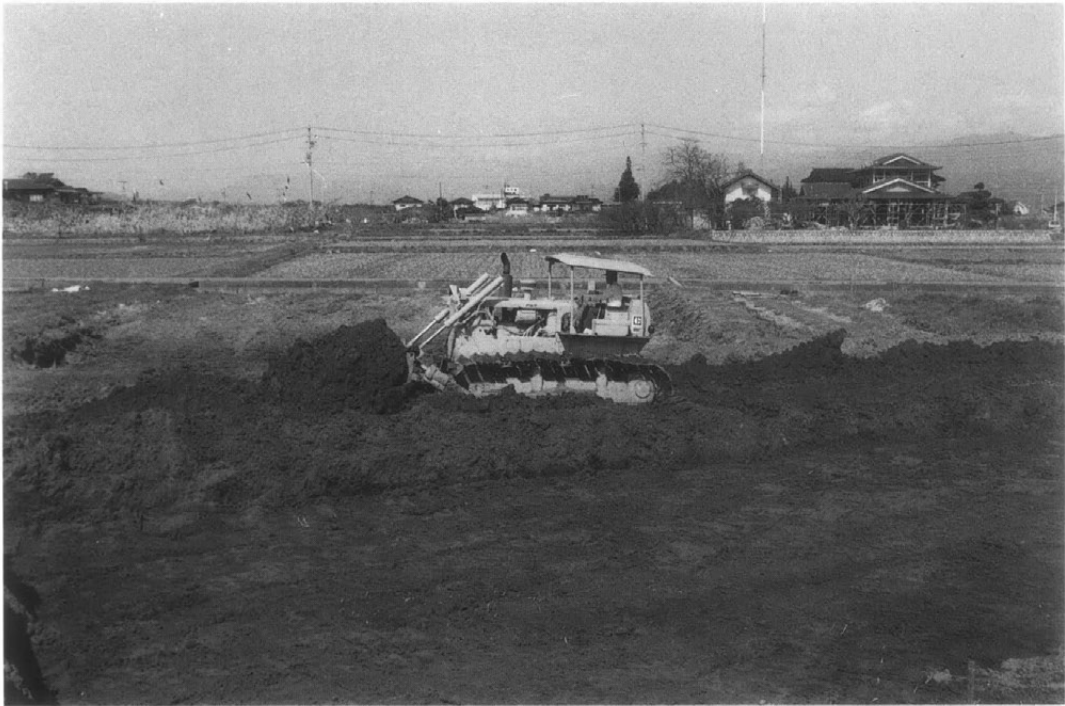
土坑71



豎穴25



遺構外出土遺物



重機表土剥ぎ作業



調査スナップ



調査スナッフ



委託測量作業

た い ざ い せ き
田 井 座 遺 跡

店舗建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1996年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145番地

飯 田 市 教 育 委 員 会

印 刷 杉 本 印 刷 株 式 会 社
